



新 顎十郎捕物帳 2

都筑道夫

しん あごじゅうろうとりものちよう
新 顎十郎捕物帳 2

つづみち お
都筑道夫

© Michio Tsuzuki 1988

1988年10月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社廣済堂

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願い
いたします。(庫一)

ISBN4-06-184317-6 (0)

新 顎十郎捕物帳 2

目次

三味線堀

貧乏神

亀屋たばこ入

離魂病

さみだれ坊主

閻魔堂橋

215 171 131 89 47 7

先代顎十郎とその作者に捧げる（本作は久生十蘭氏ご遺族のお許しをえて刊行されました）

三味線堀

一

「船頭さん、柳橋の料理屋へ、つけるはずじゃあなかったのかえ」
提銅壺から、藍いろ染つけの爛徳利をつまみあげて、盃をみたしながら、艦に声をかけたのは、ご存じの顎十郎。まっ昼間から、すだれを巻きあげた屋根舟におさまって、大川をのぼっているところを見ると、例線方撰要方兼帯をつとめる北町奉行所へは、あいかわらず顔を出していないらしい。

「柳橋はどうにすぎました。首尾の松へでもつけましようか」
と、返事は舳からあった。顎十郎はそちらに顔をむけて、

「屋根舟に船頭がふたりいても、おかしくはねえが、お前さん、さっき迎えにきた人じゃあないね。兄貴分かえ。舟にのせて、酒を飲ませて、おれになんの用がある」

九州久留米二十一万石、有馬中務大輔の三田の上屋敷の中間部屋で、例のごとく、ごろっちやらしているところへ、

「仙波阿古十郎さまへ、お取りつきねがいます。佐竹さまの御留守居が、お目にかかって、ご

意見をうかがいたい、かめせい亀清までお越しただけなものか、と申しております。赤羽橋まで、舟を持ってきておりますが、いかがでございましょう」

と、いなせな船頭がやってきて、門番所での口上。こくじょう亀清——かめ亀屋清右衛門は、まんぼち万八——よろずや万屋八郎兵衛とならぶ両国柳橋の有名料亭だから、食いいじのはった顎十郎は承知して、赤羽橋ぎわの有馬屋敷を出てきたのだった。舳の男は屋根の下へ入ってきながら、

「ご無礼をいたします。お願いしたいことがあります、佐竹さまの名を借りましたが、まんざら縁がない話でもございません」

と、ほお頬かぶりをとって、ひざ膝をそろえた。大家の若旦那のような、品のいいその顔を見て、顎十郎はにやにやしながら、

「こりゃあ、おどろいた。ふせがね伏鐘の重三郎さんかえ。大番屋から、逃げたことは聞いているが、お江戸にいるとは知らなかった」

「しばらくかみがた関西にいておりました、近ごろ戻ったんでございます」

「またなにか、大仕事をもくろんでいるのかえ。それが佐竹侯と、縁があるのかな」

「そんなところですが、けちがつきまして、あきらめました。わたくしの手下に、阿弥陀の六蔵あみだというのがおりましたが、こいつが殺されました」

「一日に四十里しじゅうり、歩くという男じゃあねえか」

「はい」

「名前だけは、聞いている。そりゃあ、お前さん、気を落しなすったろう」

「つかまって打首になったとか、お上に刃むかって斬られたというのなら、あきらめますが、卑怯な殺しかたをされたもので——仙波さま、お願いでございます。仇をとっていただけませんか」

「おれに頼むというのは、それだけの理由があるからだろうな」

「はい、仇というのが、藤波の旦那だからでございます。六蔵は、南の藤波友衛に殺されました」

「はて、そんな話は聞いていねえが——藤波が斬ったというなら、わけのあることにちげえねえ。かたき呼ばわりは、むずかしからう」

「藤波の旦那は、刺したとはいっておりません。そこが、くやしゅうございます。おとこの午すぎ、ひどい夕立ちがありましたらう」

「あったな。八時半（午後三時）ごろか。だいぶあちこちに、雷が落ちたそうだな」

「その夕立ちのちよっと前に、六蔵は下谷七軒町の長屋から、用たしに出かけたんです。わたしのところに用があったんですが、すぐにつけられていることに、気がついたらしいんで」

七軒町は、華蔵院という寺の門前町で、現在の台東区元浅草一丁目、都立白鷗高等学校があるあたりだ。まわりは大小の武家屋敷で、上野広小路のほうへ道をとると、すぐ左右に大名の上屋敷がある。右にあるのが九州柳川、十一万九千余石、立花飛騨守の屋敷。左は秋田久保田、二十万五千余石、正月の人かざりで有名な佐竹右京大夫の屋敷だ。大名屋敷の門松は、それぞれのお国ぶりで、豪勢にかざりつけるが、佐竹邸では松も、竹も立てない。そのかわりに、元日か

ら七日まで、門の左右にひとりずつ、麻^{あさ}袴^{がみしも}の家臣を正座させておく。むろん朝から晩まで、おなじ武士が、すわっているわけではない。時間で交替するのだが、これが佐竹の人かぎり、ひと門松と呼ばれて、下谷の名物になっている。

「そこで、広小路のほうへは行かずに、小島町の町^{まち}屋^やから、旗本屋敷の小路をぬけて、佐竹屋敷の前へ、出たんでしよう。門前を左に切れて、三味線堀^{しやみせんぼり}にかかったところで、夕立ちがふつてきた。実はこのとき、うしろはもろろん、堀のむこうがわにも、南のお手さきが、六蔵を追つていたんです。転^{てん}轡^{じん}橋^{はし}へかかったところで、雨あしが激しくなつたと思うと、ぴかっと来て、大がみなり。佐竹さまのお庭の大榎^{おおえのき}に、落ちたそうですから、大そうな音がして、目の前がまっしろけになったことでしょう。六蔵はこわいもの知らずの男ですが、ただひとつ、雷が苦手。転^{てん}轡^{じん}橋^{はし}をわたりかけたところで、つつ伏してしまつた」

「そりゃあ、無理もない」

「手さき連中も立ちすくんだり、うずくまったりしていたそうですが、いまだ、ひつくくつちまえ、とまっさきに走つたのが藤波、という話です。ところが、六蔵は腹をさされて死んでいて、下手人らしいやつは、どこにもいなかつた、というんですがね」

と、重三郎は顔をしかめた。船頭の絆^{はんとん}纏^{てん}をきいていても、商人^{あきんど}のように、ていねいな口をきいているこの男、大泥坊にはとても見えない。若いころ、寺院の釣鐘がこわれて、落ちたなかに匍^はいこんで、みんなの見ている前でぬけだしてみせた、ということから、異名が伏鐘。幕府への運^{うん}上^{じやう}金^{きん}を、積んでいる馬^{うま}ごと、山ちゅうで消してみせたり、大川から穴を掘って、大名屋敷の御^ご

金蔵^{きんぞう}を底ぬけにしてみせたり、江戸っ子をいつも、あつといわせている大泥坊が、顎十郎に頭をさげている。奇っ怪しぐなことだけれども、顎十郎は平然として、

「つまり阿弥陀の六蔵は、ぴかりがらがらどしん、というあいだに殺されて、その直前にも、直後にも、そばにだれもいなかった、というわけかえ」

「そうなんで——見とおしのきく橋の上。近くにあるのは、武家屋敷の塀^{へい}ばかり、どこにも逃げられない、というわけです」

と、重三郎はうなずいた。上野の不忍池^{しのばずのいけ}から、流れだしている忍川^{しのぶがわ}は、武家屋敷の塀ぞいに、佐竹屋敷まできて、三味線堀に入っている。堀から出ると、鳥越川^{とりこえがわ}という名になって、元鳥越から猿屋町^{さるやちやう}、蔵前から大川に流れこむのだが、三味線堀は人工のいわば溜池^{ためいけ}だ。細い鳥越川を棹^{さお}に見立てると、ほぼ四角くひろがった堀は、三味線の胴に見える。だから、三味線堀と呼ばれて、棹の鳥越川にかかる最初の橋は、絃^{いと}を巻きしめる横棒に見立てて、転轡橋。

「どこにも逃げられないから、ほかに下手人はいない。いちばん先に走りよった藤波友衛が、やっただけに違いない、というのは、早合点^{はやがてん}すぎないかな。ほかにもなにか、理由があるのかえ」

顎十郎が聞くと、重三郎は苦笑いして、

「いやな話を、お聞かせいたします。実は大番屋から、わたしを逃がすために、六蔵のやつ、南の旦那をひとり、抱きこんだんでございます。そんなことをしなくても、逃げる手はあったんですから、六蔵をあつて、叱^{しか}りつけました」

「まさか、その南の同心というのが、藤波じゃあ、あるまいね」

「いまは、そうだ、と思っております。わたしが不機嫌だったものですから、南の旦那の名は、いかなかったんですよ、六蔵は——大した金をつかったようだから、そのせいもあるんですよ。わたしも、しいては聞かなかったんですが……」

「六蔵がお手あてになって、へたなことを喋られちゃあ、困る。それで、金をもらった同心が、口を封じたというのは、なるほど、筋みちが通っているの。だが、それにしても、藤波ならば……」

「六蔵は頭をかかえて、うずくまっていたんです。藤波の旦那でも、逃げようとしたとか、刃むかってきたとは、いえなかったでしょう」

「うむ、もつともだ」

「いかがでございましょう、仙波さま。わたくしの願いごと、聞きとどけていただけますか」

「そうさの——六蔵ころしの下手人をつきとめろ、という頼みなら、聞いてもいいぜ。ただし、その下手人が、藤波とはかぎらねえ。それでも、いいかえ」

「仙波さまのご眼力には、まいど兜をぬいでおります。納得させてくださりゃあ、それでけっこうで」

「そうと話がきまったら、もうすこし、飲ましてもらおう」

と、顎十郎は徳利をとりあげた。とたんに日がかげって、川上の空で、かみなりが聞えた。江戸の夕立ちは、すさまじい。吾妻橋の上から、両国橋あたりまで、あっという間に黒雲がひろがって、日ざしにきらめいていた川水が、いぶし銀のいろに変わったと思うと、大つぶの雨に、さっ

と水しぶきをあげはじめる。川下の新大橋のほうは、芝居の書割^{かきわり}みたい、くつきり日ざしにまだ明るい。だが、浅草から、本所^{ほんじょう}へかけての空は、灰いろの雲におおわれて、それを稲妻が切りきくと、たちまち雨あしが激しくなった。蔵前から、本所へわたる御厩^{おんまや}河岸^{がし}の渡し舟が、この夕立ちに川なかであって、うろたえる客たちを、船頭が大声でしずめている。その声も、屋根舟の屋根をたたく雨音に、たちまち、うしろに聞えなくなつて、

「すぐに、すだれをおろします。近くの棧橋^{がんぎ}につけましょうか」

と、重三郎は腰を浮かした。艫^{かぶ}の船頭は、着ているものをぬぎすてて、下帯ひとつで、櫓をこいでいる。

「陸^{おか}へあがつたところで、濡^ぬれるばかりだ。船頭には氣の毒だが、このまま進めていても、夕立ちはずぐ通りすぎるさ」

と、顎十郎がいったとたん、頭上の雲をかきまわすような雷鳴が起つて、つづく稲妻に一瞬、あたりがまっ白になった。槍^やの束^{たば}をつき立てるみたいに、雨あしは川水にしぶきをあげて、岸の家なみも、もう見えない。白雨という言葉が、いかにもふさわしい景觀^{おきなみ}だった。大鍋^{おきなべ}で豆を煎^いるように、屋根をたたいていた雨音が、急に弱まったと思うと、薄絹をはがすみたいに雲が薄れて、ぼんやり浅草寺の五重塔が見えはじめた。

二

あくる日の正午^{ひる}ちかく、下谷の三味線堀のほとりを、ひどく目につくふたりづれが、歩いてい

た。暑苦しい黒羽二重はぶたえの素裕すあわせの胸をくつろげて、剥はげちよろ鞆ぎょうの大小を落しぎしにした侍は、馬が大あくびをしたほどに、顎が長い。もうひとりとは町人で、蚊とんぼみたい、手足が長い。このふたりが、佐竹右京大夫上屋敷の前まできかかると、どっしりした長屋門の左右に、つきだしている唐屋根からやねの門番所から、門番が走りでてきて、

「仙波先生、なにか落しものでも、なさいましたか。お手つだいすることがありましたら、部屋のものを呼んでまいります……」

「三味線堀をのぞきこんでいるんで、落しものをした、と思ったのかえ。堀をさらってくれようてえのは、ありがてえが、そうじゃあねえんだ」

顎十郎が首をふると、門番はがっかりしたように、

「ご用があつたら、なんでもおっしゃってください。しばらくお見えがないんで、部屋のものが淋しがっておりますよ」

「うむ。先おとといの八つ半ごろ、大夕立ちがあつたが、あるとき、門番所にいたかえ」

「おりました。ひどい落雷がありまして、お庭の大榎が、裂けました。門番所にいても、がぁんといつて、耳がしばらく、聞えなかったくらいです」

「落雷のあと、往来でさわぎがあつたはずだが――」

「気がつきました。町方のひとたちが、転轆橋のほうへ、駈けていきましたな。堀のむこうにも、捕手がいたようでしたが……」

「反対に転轆橋のほうから、急いできたものはいないかえ」

「耳が聞えなくなったような気がして、火事にでもなっていやしないかと、外を見ました。ですから、堀の両がわを、捕手が走っていくのに気づいたんですが、転轡橋のほうからは、だれもきませんでしたな」

「ありがとうございます。部屋のみんなに、よろしくいってくれ」

部屋というのは、中間部屋のことだ。顎十郎は、どこの屋敷へいっても、先生、先生、としたわれる。門番が門番所へもどるの見送りながら、神田鍋町なべちやうの御用聞、ひよろりの松五郎は感服していた。

「阿古十郎さんは、ふしぎなおひとだ。なんの得とくにもならないのに、中間どもは役に立ちたがる。そうかと思えば、大泥坊にものを頼まれて、おどろきもしないで、ひきうける。伏鐘の重三郎が、江戸に舞いもどったとは、知りませんでした」

「隠れ家をかぎださなかったのが、不服なんじゃあねえか、ひよろ松」

顎十郎がにやりとすると、松五郎も苦笑いして、

「おれはけちな帳面くりで、手さきじゃあねえ。盗つとや人ころしの肩に、手をおくような真似はしねえのだ。阿古十郎さん、お得意のせりふは、よく存じておりますよ。それに、江戸にすることがわかりゃあ、いまのうちから手くばりをして、来月、こちらの月番になるまでには、なにかつかめやしょう」

「おめえたちが、伏鐘は江戸にいねえ、と思っていたのに、南じゃあどうして、阿弥陀の六蔵のいどころを、嗅ぎだしたのだえ」